

執筆担当・伊藤太一

## はじめに

今日、SDGsという言葉やそのロゴを目にしない日はないほどになっているが、その元になった「持続可能な開発(sustainable development)」にこそ、「ブルントラント報告(World Commission on Environment and Development 1987)」に記された「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」という定義が引用されることが多い。

だが、七年前の「世界保全戦略WCS (IUCN, UNEP and WWF 1980)」では、「持続可能な開発は生きていく資源の保全である」として、「保全(conservation)」とは「将来の世代の必要や願望を満たせるようにしつつ、現在の世代に最大の持続的ベネフィットをも

たらすような人間による生物圏利用の管理」と定義される。すなわち、ブルントラント報告による「持続可能な開発」とWCSによる「保全」がほぼ同義となっている。一方で、WCSでは、利用の対象が「生きていく資源」や「生物圏」であると明記されている。そこで、「持続可能な開発」と「保全」の間に「生物圏」との関係について、米国の保全財団からUNESCOの人間と生物圏MABプログラム立ち上げにもIUCNのWCSの理念形成にも関わったダスマンの著作の分析から明らかにする。

## Ⅰ. ダスマン(R.F. Dasmann 一九九一〇〇)とMAB

ダスマンは一九一九年にサンフランシスコで生まれたが、警官だった父親はスペイン風邪でこの世を去っていた。経済的困難のため

か四年間の軍役を終えてから、カリフォルニア大学バークレイ校に入学し、S. レオポルドの指導のもとで研究費も生活費もまかなえる野生動物管理の研究で一九五三年に博士号を授与された。その後レッドウッド林業地域のアーカタ(Arcata)にあるハンボルト州立大学で教鞭を取りながら、「環境保全学(一九五九)」、「アフリカの野生動物牧場(一九六三)」、「野生動物生物学(一九六四)」、「カリフォルニアの破滅(一九六五)」という著作を出版した。

これらの業績が評価され、一九六六年一月には首都ワシントンの保全財団に国際プログラム長として着任し、すぐにMABプログラム立ち上げ支援を依頼される。パリに単身赴任しUNESCO本部でMABの準備に携わることになり、「保全と環境の合理的利用」という背景報告をとりまとめた(Jarrell 2000)。その成果として一九六八年九月にパリで生物圏会議が開催され、「生物圏の利用と保全」という報告書(UNESCO 1970)がまとめられた。これを踏まえ一九七一年にはUNESCO総会でMABプログラムが承認さ

れる。なお、MABプログラムにおいて「生物圏リザーブR」が登場するのは一九七四年になってからである。

一方で保全財団は「国際的開発における生態学的視点」という会議を、生物圏会議の三カ月後、一九六八年一月にワシントン郊外で開催している。それに続く会議は一九七〇年九月にFAOのあるローマで開催されIUCNと保全財団は「経済開発における生態学的ガイドブック」を出版することにした。この年に保全財団からIUCNに移ったダスマンは三年後「経済発展のための生態学的原則(Dasmann et al. 1973)」というガイドブック(図1)をIUCN・保全財団から出版する。

このようにダスマンは保全財団、UNESCO、IUCN、FAOという組織に関わりながらこのガイドブックをまとめた。

## Ⅱ. ガイドブックの特徴

このガイドブックは、「保全と経済開発は共通の目標にむかうべきである」との視点から、経済開発の成功には生態学的要因の考慮

が不可欠で、合理的資源利用によって質の高い生活が送れるとして同じ目標に立つとした。すなわち(1)将来に多様な資源利用オプションを残し、(2)限界地域の開発よりも農牧業の集約化を図り、(3)種と生態学的コミュニティの保全が開発の最初のステップであるという考え方である。

さらに、熱帯林、牧草地、農地、流域という空間別の開発に加えて、観光開発の章を設け、保護地域のゾーニングや、保護地域周辺住民の生活も考慮している。

このガイドブックでは「持続可能な開発」ということは使われていないが、内容から持続可能な開発のためのガイドブックと言える。なお、一九七二年の国連人間環境会議を踏まえ、UNEPの設立が決まったが、その最初の責任者ストロング(M. Strong)が「エコディベロPMENT(ecodevelopment = ecologically-based development)」を使ったとされる(Jarrel 2000)。ダスマンは「環境保全学」の第五版(一九八四)においてエコディベロPMENTの章を設けて「生態学だけではなく、文化的データも考慮」する」という説明をして、経済重視の

持続可能な開発との違いを述べている。

### 三. MABと持続可能な開発

今日、MABプログラム自体よりも「生物圏リザーブ」が広く知られ、「持続可能な開発」との関係があまり認識されず、特に日本の研究者はIBPの延長と誤解した。だが、ダスマンがIBPを「純粋な科学プログラム」で、「優れた研究がされていたが、それを活用することができなかった」と批判している(Jarrel 2000)ように、IBPの否定からMABは始まった。すなわち、MABは生物圏の合理的、あるいは持続的利用のためのプログラムである。だから、生物圏リザーブにおいてもさまざまな利用が可能なバッファや住民もいるトランジションが設定されている(Battise 1982, Dasmann 1988)。すなわち、

持続可能な開発との関係からすれば、コアよりもバッファ、さらにトランジションが重視される空間となる。そう考えると「生物圏保存地域」という資源や空間の利

用、さらには定住を否定するような訳となったのは残念である。

### おわりに

日本では保全を「(自然)保護」と誤訳したり、「国立公園の保護と利用」のように利用の対立概念として捉える傾向がある。確かに一九六〇年代までIUCNもそのような傾向であったが、一九七〇年にダスマンが加わった頃から変貌した。ストックホルム会議や世界国立公園会議が開催された一九七二年には「開発のための保全」という章のある報告をダスマンはまとめている。さらに、一九八〇年には「生きている資源の保全によって持続可能な開発に資することを目的」とするWCSが発刊され、保全が持続可能な利用という位置づけとなった。

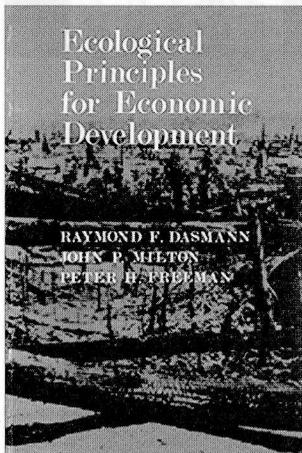


図-1 ダスマンらによる「経済発展のための生態学的原則」の表紙

### 文献

(1) Battise, M. (1982) The biosphere reserve: A tool for environmental conservation and management. Environmental Conservation, 9 (2): 101-111

(2) Dasmann, R.F., Milton, J.P. and Freeman, P.H. (1973) Ecological principles for economic development. John Wiley & Sons LTD, 252 pp.

(3) Dasmann, R.F. (1988) Biosphere reserves, buffers, and boundaries. Bioscience, 38 (7): 487-489.

(4) Jarrel R. ed.(2000) Raymond F. Dasmann: A life in conservation biology. Regional History Project, University Library, University of California, Santa Cruz

(5) IUCN, UNEP and WWF (1980) World Conservation Strategy.

(6) UNESCO (1970) Use and conservation of the biosphere: proceedings of the intergovernmental conference of experts on the scientific basis of the resources of the biosphere Paris 4-13 September 1968.

(7) World Commission on Environment and Development (1987) Report of the world commission on environment and development: Our common future

伊藤 太一・いとう たいいち

江戸川大学国立公園研究所客員教授。最近「自然環境の美学」というダスマンの講演録を見つけた。その中で、自然の多様性が自然の安定性をもたらすと述べている。一九六六年五月二四日にオハイオ州立大学での講演となつているから、八月に東京で開催された第一一回太平洋学術会議に参加する前のことだ。